様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２４８６

研究課題名（和文）「日本的なるもの」の伝播と深化

研究課題名（英文）Transmission and exploitation of "Japanese-ness"

研究代表者
鵜飼　敦子（UKAI, Atsuko）

東京大学・東洋文化研究所・特別研究員

研究者番号：３０５８４９２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：高島得三（北海）は、農商務省の技術官吏として、1885年から3年間、フランス北東部の街ナンシーの森林高等学校に派遣された。日本から携えてきた筆を用いて、北海はナンシー派の芸術家たちを前にして実際に画を描いてみせており、そのような実演を伴った北海の作品は「即興性」「偶然性」という新しい芸術のありようを当時の美術評論家および芸術家に示していた。同時に、高島は、中国、韓国、フランス、アメリカにおいても制作をおこない、それぞれの地域で受容されていたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでのように、国ごとの美術史ではなく、文化の交渉史としての美術の歴史を考えるため、19世紀フランスをはじめ中国、韓国、アメリカを旅して制作活動をした明治政府の官吏、高島北海という人物に焦点をあてて研究をおこなった。
二国間の比較をして影響関係をとらえたり、縦割りの美術史を考えるのではなく、「人の動き」に注目した新たな美術史を描くことで、時間や場所を縦横断するような新たな美術の歴史叙述をおこなう。このことにより、「美術」をとおして、私たちには共通のいとなみがあり、ともに生きているという認識を共有することが可能となる。

研究成果の概要（英文）：Takashima Tokuzo (Hokkai) was send as a technical officer of the Ministry of Agriculture and Commerce to the School of Forests in Nancy, a town in northeastern France, between 1885 and 1888. Using a brush brought from Japan, Hokkai impressed the French art critics and artists with his live demonstrations. They qualified his work “improvisation” and “chance”, creating a style of art that was totally new at that time. At that period, Takashima produced works not only in France and the United States, but also in China and South Korea, and it became clear that his art was appreciated in each region.

研究分野：日仏文化交渉史

キーワード：ジャポニスム　日仏文化交渉史　美術史　高島北海　グローバルヒストリー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「日本的なるもの」がどのようにつくりあげられ、受容されたのかを解明しようと取り組むなか、とりわけ美術史のひとつの現象としてとらえられている「ジャポニスム」に注目してきた。「日本趣味」や「日本への傾倒」と訳される、このジャポニスムという事象については、これまで主に、19 世紀末のフランスを中心とする「受容」に関する研究がおこなわれてきた。しかし、一方的な文化の影響論や、盲目的な「日本文化」の礼讃論というような、従来の比較研究のあり方に疑問を感じ、双方向的な異文化交流のかたちを探るという目的をもって、「ジャポニスム」という現象をとらえることができないかと考えた。そこで注目したのは、高島得三（北海）という人物である。1885 年から 3 年間、フランス北東部の街ナンシーの森林高等学校に派遣された高島は、日本から携えてきた筆を用いて実際に画を描いてみせていた。それらの実演を伴った作品をとおし、ナンシー派の芸術家との交流がうまれたことはすでに明らかにしていたが、さらにフランス以外の第三の軸を置くこと考え、「影響関係」は双方向だけでなく、多方向に起きていると仮定し、同時に、これまでの研究が比較の基準としてきた「国」や「共同体」などの枠組み自体を疑うことを試みた。

２．研究の目的

従来おこなわれてきたジャポニスム研究のように、「国」や「国民国家」といった既存の枠組みに頼り狭い範囲で比較する研究が存在しているということがこれまでの研究で分かった。従来の美術史は人間集団の枠組みを強調し、「自」と「他」の文化に分ける装置であったといえる。このような枠組みをもとにして一国史観や二国間の比較という手法で美術史を描くことには限界があると考える。従来の美術史の叙述方法をみなおし、「人の動き」に注目した新たな美術史を描くことで、時間や場所を縦横断するような新たな美術の歴史叙述をおこなうことができれば、美術館の展示や教科書の記述等、生活のさまざまな場面に用いられる既存の美術史の枠組みを新たな枠組みへと刷新できる。そして、そうした媒体に接した人々の世界認識が変化すると考えられる。この叙述をとおして、我々には共通のいとなみがあり、ともに生きているという認識を共有することが本研究の目的である。

３．研究の方法

①東洋と西洋の影響論ではなく、アジアという第三の軸をおき、さらにはユーラシア大陸とアメリカのジャポニスムというこれまでにない新たな視点を設けること。②これまで国内外でおこなわれてきたジャポニスム研究の多くが西洋の芸術家や作品を中心とするものであるのに対し、科学的合理精神と芸術の才能をもちあわせていた高島北海という日本人に焦点をあてること。③美術史に特化したジャポニスムを考えるのではなく、芸術と科学の関わりなど、日本の近代化という文脈で考察を加え、学術的論考をはかること。これら三点を研究の特色として研究を進めた。

４．研究成果

先行研究で専ら行われてきた日本からフランスへの一方向的な影響関係論を乗り越え、フランスから日本へという双方向の影響関係があったことを明らかにすることができた。高島の活動を示す歴史資料を、これまでフィールドとして調査がおこなわれてきたフランス以外にも、アメリカと中国での活動を検証し、当時のジャポニスムを取り巻く社会的状況を明らかにすることを試みた。そして、フランスからの帰国後、「西洋」に傾倒することなく、「東洋画」を選ぶこと

となった高島北海にとってのフランス留学の意義を明らかにし、フランス滞在、とりわけナンシーの芸術家との交流が高島に「東洋人」としての自覚を生んでいたことを明らかにした。

コロナ禍により国外での調査が難航したが、国内での資料の整理を重点的におこない、また新資料の発掘として国内の美術館、博物館での調査をおこなった。下関市立美術館の河村幸次郎コレクション調査で明らかとなった植物学の知識と関連性があると考えられる植物画 200 点、北海資料として残されている写真約 100 点の整理をおこなった。その結果、高島北海という人物の科学的合理精神について読み解く鍵となる資料調査ができた。同時に、高島とフランスで交友関係を持っていたナンシーのエミール・ガレについて、「芸術の普及者」として美術に階級をつくることを拒む姿勢についてとりあげ、資料から分析をおこなった。これまでに、高島北海の作品が、フランスのナンシーにおいて「即興性」「偶然性」という新しい芸術のありようを芸術家たちに示していたことを明らかにしていたが、フランスの芸術家の言辞を分析することにより、植物学や芸術について科学的合理精神を高島と共有いたという新たな発見があった。これらの分析結果を展覧会図録の投稿記事として執筆、掲載した。また、中国の研究者と、農商務省の技術官吏として、中国、韓国、フランス、アメリカで森林学の調査をおこなった北海の活動について意見をかわす機会を持ち、森林学を調査しながら芸術活動をおこなっていた高島北海が、中国でどのように受け入れられたのかを確認することができた。北海が、すでに習得していた西洋画ではなく、あえて日本的な画風の即興制作をおこなっていたことが分かり、そのような北海の姿勢が、中国でどのように異なっていたのかを解明する手掛かりとなった。スコットランド国立博物館に、これまで知られていなかった高島北海の作品が収蔵されていることを明らかにし、実見に先立って写真資料を入手し、分析することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 鵜飼敦子	４．巻 0
２．論文標題 万国博覧会を飾った日本の革と紙―ジャポニスムを越えて（韓国語翻訳）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 万国博覧会と人間の歴史（韓国語翻訳）	６．最初と最後の頁 275-294頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 鵜飼敦子	４．巻 0
２．論文標題 美術作品と「オブジェ・ダール」―エミール・ガレの行政に対する姿勢」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アール・ヌーヴォーガラスの世界展図録	６．最初と最後の頁 4-7頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鵜飼敦子	４．巻 なし
２．論文標題 「美」の階級―エミール・ガレの東洋観	５．発行年 2020年
３．雑誌名 2020アール・ヌーヴォーガラスの世界展	６．最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鵜飼敦子	４．巻 なし
２．論文標題 芸術の普及者エミール・ガレ―「東洋」から学んだこと	５．発行年 2019年
３．雑誌名 アール・ヌーヴォーガラスの世界展	６．最初と最後の頁 4- 7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 鵜飼敦子
2．発表標題 上海万博の「セルヴィス・ルソー」グローバル・アート・ヒストリーへの階梯
3．学会等名 国際シンポジウム「万博学」（国際学会）（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 鵜飼敦子
2．発表標題 コメンテーターおよびディスカッション
3．学会等名 武漢華中師範大学（オンライン参加）比較視野下的博覧会史国際シンポジウム（国際学会）（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 鵜飼敦子
2．発表標題 アートディレクターとしてのエミール・ガレ
3．学会等名 U-talk
4．発表年 2019年

1．発表者名 鵜飼敦子
2．発表標題 エミール・ガレと万国博覧会
3．学会等名 国際日本文化研究センター共同研究会「万国博覧会と人間の歴史」
4．発表年 2018年

１．発表者名 鵜飼敦子
２．発表標題 上海万国博覧会「世博会博物館」
３．学会等名 上海高等研究院国際シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

2022年2月13日付日本経済新聞15頁「19世紀園芸の東西交流」にナンシーでの調査および北海についての研究活動が紹介された。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
国際シンポジウム「万博学」	2020年～2020年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関